

ドクター・ジョンソンのウェールズの旅  
——なぜジョンソンは『ウェールズの旅』を書かなかったのか——

江 藤 秀 一

はじめに

ドクター・サミュエル・ジョンソン Dr Samuel Johnson は 1774 年、友人のスレイル夫妻 Mr and Mrs Thrale とその娘のクウィニー Queeny とともに、ウェールズ北部へ旅に出る。7 月 5 日から 9 月 30 日までの 3 カ月弱に及ぶ旅であった。この旅の目的は、スレイル夫人が同地のバハグライグ Bachygraig にある土地を相続することとなり、その手続きのためであった。この前年にはジョンソンはジェイムズ・ボズウェル James Boswell とスコットランドのハイランド地方および西方諸島を訪れており、ジョンソンにとってこのウェールズ行きはスコットランドの旅との比較の旅ともなった。ボズウェルはジョンソンがロンドンに戻った際に、「先生は昨年はスコットランド、今年はウェールズを訪問されて、まったくもって登山家になられたことでしょう。次はスイスへ行かねばなりません」<sup>1</sup>と手紙で述べ、あわせてスコットランド旅行記と同様にウェールズ旅行記を執筆するように勧めた。それに対してジョンソンは次のようにボズウェルに返事を書いている。

私は北ウェールズ 6 州のうちの 5 州へ行き、セント・アサフ St Asaph とバンゴール Bangor の二つの主教座地を見物し、ペンマインマウル Penmaenmawr とスノードン Snowdon 山に登り、アングルシー



バハグライグの館

Anglesey 島に渡りました。しかし、ウェールズはイングランドとほとんど違いがないので、旅行者の思索に資するものは何也没有ません<sup>2</sup>。

ボズウェルはまた、「スレイル夫妻に同行したこの旅は確かに博士の健康と娯楽に資するものであったが、我々のヘブリディーズ諸島への旅ほどにはあれこれ心を働かせる機会とはならなかった」と述べ、ジョンソンが「荒涼とした不毛の山々ではなく、緑の肥沃な山々があった。ウェールズの城の一つの中にスコットランドで見てきたすべての城の要素が含まれている」(*Life*, ii, p. 285) と述べたことを伝記に記している。

また、ジョンソンは 1774 年 10 月 20 日にジョン・テイラー John Taylor に宛てて、次のように述べている。

ウェールズには好奇心をかきたてたり、それを満足させたりするもの

は何もありません。生活は完全にイングランド風です。目新しいものは何も見ませんでした。行ってみてよかったです。見るべきものがないということがわかりましたので。(Letters, II, p. 151)

さらに、このウェールズの旅行から3年後の1777年9月13日に、ジョンソンはスレイル夫人に宛てて、次のように書いている。

ボズウェルはウェールズを見物したがっておりますが、バハグライグの森を除いて、ウェールズには何があるというのでしょうか。そこには無知の飢えを満たし、好奇心の渇きを鎮めるものがあるのでしょうか。(Letters, III, p. 66)

このような手紙から、例えば、古くはジョゼフ・ウッド・クルーチ Joseph Wood Krutch は「ジョンソンはかなり面白みのない日記を記し、スレイル夫人はそれほど興味を引くことのない日記を記しており、その両者からこの旅はたいして成功しなかったように思われる」<sup>3</sup>と述べている。その理由として、ジョンソンは前年にスコットランドで荒涼たる景色に接したあとなので、同類の景色を見ることにはそれほど情熱を感じなかったのではないかとしている。また、最近ではピーター・マーティン Peter Martin が「ウェールズの旅は大成功ではなかった。クイニーはこの旅行中、体調がすぐれず、スレイル夫人は無口だったし、ジョンソンはそれほど感動しなかった」<sup>4</sup>と述べている。

確かに、ジョンソンの日記は短くて、メモ程度のもが多い。ジョンソンはスコットランド旅行で荘厳な景色におそれおののき、人間存在についてさまざまに思いを巡らした。しかし、ウェールズでは旅行者にさまざまな思いを巡らせるような題材は見つけられなかったようだ。それでもジョ

ンソンは3カ月近くにわたってウェールズの城や教会や山や湖を訪れ、現地の町の様子などを見物し、濃淡のある日記を残している<sup>5</sup>。その日記からジョンソンがウェールズの旅行記を書く意思があったのではないかと思われる節も見られる。その根拠としてデマリア・ジュニア DeMaria Jr. は、ジョンソンのウェールズの日記には『スコットランド西方諸島の旅』(*A Journey to the Western Islands of Scotland*)に見られるような複雑で繊細な風景の描写があるとしている<sup>6</sup>。しかし、ジョンソンは先のような感想を述べて、実際には旅行記を執筆しなかった。ウェールズ旅行中のジョンソンの日記と『スコットランド西方諸島の旅』の記述を比較すると、なぜジョンソンが先述のような感想を漏らしたのか、またなぜ旅行記を書かなかったのかが見えてくる。本論ではそれを述べてみたい。

## 1. 樹木があった

ジョンソンはスコットランドを旅したとき、当地に樹木がないことを強調した。そして、「これほどに裸にされた地域は少ないと思う。ここでは将来の必要など少しも考えずに何世紀もが不毛のまま過ぎ去ったに違いない」<sup>7</sup>と述べて、スコットランド人の無計画さを責め、当地の人たちからの反発を食らった。ウェールズの旅でも樹木や森について観察していたことが日記からうかがえる。次はウェールズに到着して2日後の7月30日にバハグライグを訪問したときの日記である。

森にはたくさんの木があり、概して若木であるが、中には朽ちかけている木もある。それらは剪定されている。その家には庭はなかった<sup>8</sup>。

3週間滞在したスルウェニー Llewenny では美しい森がその地に彩りを

そえ、林間の空き地には湧き水もあって変化に富んでいた。そこにはとても大きな木もあったことをジョンソンは記している。

8月2日に訪れたマットン・デイヴィス Mutton Davies の屋敷を見て、「檜の木があるが、おろかにも今風のやり方に追従して切り倒されている。数本はまだ立っている。(中略)道は心地よい小道で、そこから樹木や草地で美しく変化に富んだ地域が見渡せた」(*Works*, I, pp. 183-84)と述べ、8月19日のアングルシーの大地主のバルクリー卿 Lord Bulkley 宅については、「バルクリー卿の家はとても貧相だが、庭は広くて、大木と小木が散在して、木陰がある」(*Works*, I, p. 202)と述べる。

8月22日の記録では、カナーヴォン Caernarfon 州の州長官であったヒュー・グリフィス Hugh Griffith の屋敷の様子を次のように述べている。

私たちは四角い部屋のある小こぎれいな家を見つけた。壁は仕上げのしていない石、したがって分厚い石で作られている。ぴったりと組み合わせられない石は十分な厚みがないと強度が出ないからである。歩道には若い樹木をたくさん植えていた。果樹は大きくはないが、数年にわたって成長してきており、やがて根がやせた地層に達して、枯れるだろう。(*Works*, I, p. 205)

このように、ジョンソンは行く先々で屋敷の樹木の様子を観察した。前年のスコットランド旅行の際に木を植えることの重要性を訴えたジョンソンであるが、このウェールズの旅でも樹木や庭などに注目し、スコットランドとの差異を見つけようとしたものと思われる。その観察の結果、ウェールズの訪問先にはイングランド同様に樹木があり、果樹園があった。庭には芝もあった。つまり、ウェールズにはイングランドとほとんど違いのない風景があったのである。この結果、「荒涼とした不毛の山々ではなく、



緑の肥沃な山々があった」という感想をボズウェルに述べることになったのであろう。

## 2. 規模が違う

もちろんウェールズにも山がないわけではない。スノードン山あたりには1000メートル級の山々が座を占めている。18世紀後半のウェールズはピクチャレスクという芸術概念の普及とともに、画家や中産階級のイングランド人がウェールズの自然や風景に新しい美を求めて訪れてくるようになった。そして、「ヤギの国」がドルイドの神殿や魅力的な伝説に満ちた美しい土地であることを知って驚き、また興奮したのであった<sup>9</sup>。博物学者にして旅行家のトマス・ペナント Thomas Pennant は1773年と1776年に北ウェールズ地方を旅し、それを基に二巻本の大作である『ウェールズ旅行記』(*A Tour in Wales*)を1778年と1781年に刊行した<sup>10</sup>。ウェールズ人画家のリチャード・ウィルソン Richard Wilsonをはじめ、トマス・ガーティン Thomas Girtin やウィリアム・ターナー William Turner といった画家がこの地を訪れ、当地の風景画を残した。ジョンソンらも8月26日にスノードン山のふもとの湖に出かけてボート遊びをし、山のふもとの古城を訪れた。次はその折りの記録である。

私たちはウィン夫人とともにパダグ湖とベリス湖という狭い水道でつながっている二つの湖を訪れた。その湖はスノードン山とその向いの山々から流れ落ちる水からなっている。スノードン山側には大きな要塞の廃墟があり、そこに大いに苦労して登った。息が上がって、疲れ切った。湖はそれほど幅が広くないので、ボートはいつもどちらかの堤の近くにあった。(Works, I, p. 208)



ジョンソンは、湖が狭くていつもボートがどちらかの岸辺近くにいる、と述べているが、前年に訪れたスコットランドのロソホや大海原に比べると、この二つのウェールズの湖は小さすぎて、ジョンソンにこれ以上の感想を述べる材料を提供できなかったことと思われる。

また、この記録にはスノードン山の近辺についての言及もない。これも前年のスコットランドの山々に比して、規模が小さかったのが原因だと思われる。ハイランド地方は山に囲まれて、他からの進入も難しく、独特の村の生活が営まれていたのであった。ジョンソンはスコットランドの旅で十分に山の威容に心を動かされ、そこに人間存在の小ささと、人間の力の弱さを否応なく感じさせられたのであった。次の一節はハイランドのアノホ Anoch からグレネルグ Glenelg へ向かっている途中の記述である。周囲には高い山々がそびえており、孤独な雰囲気は漂っていた。ジョンソンはゆっくりと瞑想にふけた。

遺棄という災いが物思いの上に押し寄せ、人はいやが上にも己の弱さを思い知らされ、己がいかに忍耐力や行動力がないかを黙想が教えてくれる。(中略) そのとき私が座っていた場所に、食糧もなく、その土地の知識もなしにたたずんでいた人は皆、道路ができるまでは、岩場を彷徨い、食べ物も避難場所も見つからないうちに難渋して死んでいったのであろう。(『旅』、p. 55)

前年のハイランドの山々に接して、ジョンソンはこのように人間存在の弱さを悟るのであった。翻って、ウェールズの山々にジョンソンはそれを感じることができたであろうか。スノードン山のあたりは確かに山がちではあるが、ハイランドのように山、また山といった状況ではない。イングラ



ンド北部からウェールズ入りしたジョンソンに、この山は何らかの所見を述べさせる力を与えなかったようである。

### 3. 城には感激したが

ジョンソンはウェールズで6つの古城を訪れた。最初に訪れたのはデンビー Denbigh 城であったが、ここは廃墟となっており、「完全に城壁の残るその城は巨大な建造物だ。(中略)きれいに片づけて城内を歩けるようにし、残っている部分を全部明らかにするには相当の労力と費用がかかるであろう」(*Works, I, p. 181*)と述べて、その遺構の大きさに驚いたようである<sup>11</sup>。

8月4日に訪れたリズラン Rhuddlan 城については、「リズラン城は今でもとても崇高な遺跡である」と「崇高」という形容詞を用いて描写し、



デンビー城

「すべての壁は残っており、完璧な城内をたどり、高さを不十分ながらも測ることができるだろう」(*Works*, I, p. 187) と述べている。さらには円筒形の塔が6本配置されていること、それぞれの高さが18フィートほどあること、煙突のある塔は1本だけであること、したがって、生活をするにはあまり便利ではないことが述べられている。

8月19日にはボーマリス Beaumaris 城を、翌20日はカナーヴォン城を訪問した。ボーマリス城についてはその城の塔の数や建造物の位置や構造を述べたあとで、次のように記している。

この城はすべてロマンス物語に描かれるものと照応している。ここにも秘密の通路、暗い洞穴、深い地下牢、あるいはそびえたつ塔にこと欠かない。これは私が見た古城の中で最も完璧な眺めだ。(*Works*, I, p. 203)

カナーヴォン城では、前日のボーマリス城に比較して、その大きさに感動したようで、「並はずれた規模と強さを持つ堂々とした大建造物」(*Works*, I, p. 203) と述べ、「ここにはボーマリス城で見たもののすべてがなお一層大きな規模で存在している」(*Works*, I, p. 203) と述べる。ジョンソンは廃墟となったこの城の大小の部屋をのぞき、169の石段のあるイーグルタワーにも登った。そして、最後に「このような建造物があったとは考えなかった。想像を絶するものだった」(*Works*, I, p. 204) と述べる。

8月29日にはコンウィ Conwy 城も短時間ながら見学したが、「新たなものは何もなかった。ボーマリス城よりは大きい、カナーヴォン城ほどではない」(*Works*, I, p. 210) と記している。そして、その後の9月7日に訪れたチャーク Chirk 城については、ただ一言「チャーク城に来た」とのみ述べる。

コンウィ城で「新たなものは何もなかった」と記したジョンソンが最も保存状態のよいチャーク城の事をほとんど記さないのはなぜであろうか。これもスコットランドの城と比較してみると理解できる。ジョンソンはヘブリディーズ諸島でもいくつもの城を巡った。それらの城について、「これらの城は英雄的騎士道の物語が封建時代の実際の風習に基づいているというもう一つの証拠を与えてくれる」（『旅』、p. 219）と述べ、ここでもウェールズのポーマリス城のときに記したようにロマンス文学を思い浮かべたのであった。そして、遠い中世騎士が遭遇したと思われる城前での場面を想像して次のように述べる。

旅人は誰であれ防備を固めた族長の館に来ると、おそらく、狭間胸壁から尋問を受け警戒されながら門から入れてもらい、習性となっている敵愾心で粗暴となり無知からくる疑惑で警戒怠りない「小君主」に



チャーク城

紹介されたのであろう。この小君主は、普段の気質やそのときの気紛れによって、よそ者を客人として食卓につかせるか、あるいは密偵として地下牢に閉じ込めるかしたのだらう。(『旅』、p. 220)

こうして、ジョンソンはいつの間にか、自分が中世の騎士になったような気分になったのである。

スコットランドの堂々とした城にはマクラウド族やキャンベル族の氏族長が住んでおり、その威厳をまだ保っていた。そこには人間の営みがあった。それに対して、ウェールズの城はどれも同じ円柱形の塔が何本か並び、その塔の間を幕壁が走るという似たような構造になっている。しかも、どれも廃墟となっており、人間の営みはない。ジョンソンがチャーク城について何も所見を記さないのは、彼がこのチャーク城を最後に訪れており、この頃には城への関心や印象も薄れてしまっていたからであろう。それはこの城跡をたどる今日の旅人も同じことで、旅人は最後にはどれも円柱塔のある古城という漠然とした印象が残るのみである。カーナーヴォン城を見れば後は大同小異、スコットランドの城に比べると面白みがない、人間の歴史が感じられない。ということで、ジョンソンは「ウェールズの城の一つの中にスコットランドで見てきたすべての城の要素が含まれている」と述べて、ウェールズの城に感動はしたものの、やはり旅行記執筆のインスピレーション<sup>12</sup>は得られなかったようである<sup>12</sup>。

#### 4. 宗教にも関心を示した

ジョンソンはウェールズ旅行中の毎日曜日に、滞在先の教会の礼拝に参加した。また、曜日にかかわらず、訪問先に教会があれば、その教会を訪問したり、その教会の情報を入手している。

ウェールズ入りして最初の日曜日である7月31日はセント・アサフの教会を訪ねる。この教会は「大きくはないが、どこか威厳と壮麗さがある」(*Works, I, p. 180*)と感じた。しかし、教会の主教公邸を訪問して、「貧相 (mean)」(*Works, I, p. 180*)と思った。

翌日はスレイル夫人の本家であるソールズベリー家のジョンによって寄進され、すでに廃墟となってしまった教会をはじめ、教区教会などを見学した。教区教会の礼拝では祈りの言葉が3回読まれ、2回がウェールズ語で英語は1回のみであるとジョンソンは記している。

8月2日にはトレマイルヒオン Tremeirchion の教会に行く。この教区教会は「貧相 (mean) な造りである」(*Works, I, p. 183*)と述べている。ここでは、壁に掲げられた聖書の言語がウェールズ語であったことにも注目し、さらにイングランドの国境から20マイルしか離れていないのに、英語による礼拝が月に一回しかないという事も記している。

その後、8月7日と14日にはボドファリ Bodfari の教会、21日にはカーナヴォンの教会に出かけた。どちらの教会においても、礼拝の内容と礼拝に用いられる言語にジョンソンは関心を示している。

8月24日にはスレイル夫人が教会収入を得ていた教会を見て回り、次のようにその荒廃ぶりを記す。

それらは貧相で、手入れも想像できないほど疎かである。床には石が敷いてなく、地面は穴ぼこだらけで、座席は粗末なベンチである。祭壇には手すりはないし、教会の一つは屋根に亀裂があった。各教会の聖書台と思われる机の上には、ゴシック文字で書かれたフォリオ版のウェールズ語の聖書があったが、副牧師はをれを易々とは読めないと思う。(*Works, I, p. 206*)

以上のように、ジョンソンは教会に出かけては、その建物を観察し、礼拝が英語で行われているのかウェールズ語で行われているのかに関心を持っていたことが日記からうかがわれる。

一方、スコットランドでは教会の荒廃はさらにひどく、教区牧師が不在だったりして、ジョンソンは宗教の衰退を憂えた。コル島には公式の教会がなかった。以前は2つあったが、宗教改革の折に破壊されたい。したがって、島民は小屋のような小さな建物で行われる礼拝に出席することになる。ジョンソンはいくつかの島にはそのような場所すらないのを知って、島民の行く末を気づかった。

スコットランドでは教会だけではなく、牧師の不足も深刻であった。宗教改革による大聖堂の破壊は、聖職者の国外亡命や聖職離脱をもたらしたのである。

ところがウェールズの教会にはスコットランドの大聖堂のように破壊された跡もない。むしろ、建物は粗末でも、日々の礼拝が滞りなく行われていたのだ。そこにはウィリアム・モーガンによる1588年のウェールズ語の聖書があり、またそれを基に作成されたりチャード・パリー Richard Parry の小型辞書があり、人々はウェールズ語で礼拝をすることができたのであった<sup>13</sup>。

一方、スコットランドのハイランドでは英語化の問題やゲール語訳聖書の可否に関する議論があった。ハイランドでは1709年にゲール語を話すカトリック教徒たちに英語でプロテスタントの教義を教える運動が展開され、その一環として学校での英語教育が施されていた（『旅』、p. 246）。そして、1745年のジャコバイトの乱以後はゲール語はジャコバイト運動の温床とみなされ、英語教育が促進されたのである。聖書のゲール語訳もその温床になる可能性があるとも考えられ、その訳の是非が議論されていたのであった。ジョンソンは「原住民は決して使いも理解もしないであろう

言葉を読むことになる」(『旅』、p. 144) と英語化政策を批判する。また、ジョンソンはゲール語訳の聖書を支持した1人であり、聖書のゲール語訳出版を支援する手紙をエディンバラの書店主であったウィリアム・ドラモンド William Drummond に宛てて書いたのであった。その手紙でジョンソンは、「キリスト教の知識を普及させるための会合で、宗教の教えを受けていない国民が教えを受けるべきかどうか、また聖書をその国民の言語へ翻訳することによってその教えを伝えるべきかどうかという疑問が出るとは思いもよりませんでした」(Life, II, p. 27) と述べて、そのような問題が生じること自体が愚かであるとの認識を示した。

ウェールズでも英語化が進み、上流階級のほとんどの人はウェールズ語を理解できなかった<sup>14</sup>。しかし、ジョンソンが訪れた頃にはすでに文芸の復興運動が行われていた。1751年にウェールズ語の古文書収集のために設立されたカムロドリオン協会 The Society of Cymmrodorin は1771年にグワイネディデギオン協会 The Society of the Gwyneddigion となり、ウェールズ文学を促進する働きを担った。1789年には詩人のトマス・ジョーンズ Thomas Jones がウェールズの文化祭典であるマイステツズヴォッドの復活に尽力した<sup>15</sup>。エヴァン・エヴァンズ Evan Evans の『古代ウェールズの詩人の詩作品例』(Some Specimen of the Poetry of the Ancient Welsh Bards, 1764) といったケルトの吟遊詩人や「高貴な未開人」(noble savage) といったアイコン的な立場をほめたたえた作品も生まれていた。この地ではジャコバイト運動の影響はほとんどなかったのである<sup>16</sup>。ジョンソンは8月5日のグワイニノグ Gwaynynog のミドルトン氏 Mr Middleton の屋敷で食事をした際に、ウェールズ語の保存やウェールズ文学について話し合い、さらにデイヴィッド・アプ・リーズ David ap Rhees のウェールズ語文法の再刊を勧めた。18世紀後半のイギリスでは古典や古物に関する研究は顕著な傾向であったが<sup>17</sup>、ジョンソンもそれらに深い関心を示し、イギ



リスの古い言語の保存運動に対しても熱心に支持していたのである。

ジョンソンはこのたびのウェールズ旅行で当地の言語や文芸の復興運動の話を目にして、スコットランドの状況に比べると、事態は深刻ではないと判断したと思われる。「旅行者に思いを巡らせるものはない」とジョンソンはボズウェルに述べたが、日々の礼拝が執り行われていること、ウェールズ語や文学の復興の動きがあったことで、ジョンソンは満足し、格別の所見を述べる必要性を感じなかったのであろう。

## 5. 危険な道も比較の問題

8月18日、一行はスルウェニーを發ち、コンウィを経由してバンゴールまで進んだ。途中のコンウィで宿泊するはずであったが、競馬の開催で宿が取れずに、しぶしぶバンゴールまで進んだのである。その途中にはペンマインマウルという難所があり、一行はそこを往復しなければならなかった。ジョンソンは次のように記す。

私たちはバンゴールまでの間にあるペンマインマウルを昼間の明るいうちに通過したいと思っていたが、馬車が遅れて、出発は必然的に遅れることとなった。(中略)馬車がようやく到着し、幾分か不安な気持ちで出発したが、ペンマインマウルに明るいうちに着き、その道が最近とても楽で安全になっていたことがわかった。(Works, I, p. 199)

ジョンソンはスコットランドでもそうであったが、ウェールズの道路状況にも関心を示していたようで、ペンマインマウルの道路状況を次のように詳しく記している。

道は切り開かれ、その両側には壁が平行に走っている。外側の壁は旅人を深くて恐ろしい崖から守っている。この壁はあちらこちらに石の気まぐれないたずらで壊れている。内側の壁は上部の壊れた崖から落ちてくるかもしれないもろい岩から道路を守っている。山のこちら側の表面はいつ何時崩壊するかもしれないもろい岩である。旧道はもっと高いところにあつたので、ぞっとするものだったに違いない。波が道の下の方で、打ちつけている。(Works, I, pp. 199-200)

当時、ペンマインマウルの旧道は難所としてよく知られており、多くの犠牲者を出していた。確かに、18世紀前半のウェールズの道路事情はそれほどよくはなかったが、それでもジョンソンらは馬車で旅をすることができた。一方、スコットランドのハイランドや西方諸島の道路事情はウェールズの道にも増して悪かった。ジョンソンは述べる。

ヘブリディーズ諸島には道路がなく、またよそ者が道を見つけるための目印もない。馬上の人はいつもその土地の人を伴っていて、その人は獲物を追い求めたり家畜の世話をしたり、あるいは使いや案内を頼まれたりして、山の尾根のどこが広くて馬と客が十分に通ることができるか、また泥炭地や沼地のどこが十分に硬くて通行できるかを知っている。沼地は危険ではないにしても、少なくとも骨が折れるので避けて通るため、進路は一般に崖伝いということになり、その崖から下の方に敢えて目を向けようものなら、眼下には暗い窪みが見え、そこから奔流の音がときどき聞こえてくるのである。(『旅』、p. 72)

ペンマインマウルの道は確かに険しかったことであろうが、スコットランドで道なき道を進む難儀を経験したジョンソンには、その険しさは多く

を語るに値するものとは思われなかったようである。ジョンソンも述べているとおり、ウェールズの道路は18世紀半ばごろから改良され始めており、ペンマインマウルの道もジョンソンが訪れる2年前に新たに造られたものであり、旧道に比べると険しさも和らいでいたのであった<sup>18</sup>。

ペンマインマウルの不安な場所を通り過ぎたあとは、穏やかな楽しい旅となったようである。ジョンソンは次のように記す。

夕刻には月が極めて明るく輝き、危機感は今や過ぎ去り、残りの旅はとても楽しかった。(Works, I, p. 200)

短いながらも、美しく穏やかな記述である。しかし、スコットランドにてアイオナ島へ向っている際の次の描写とは比べものにならない。

やがて日が落ち、月がとても荘厳で目に楽しい光景を見せてくれた。空は晴れており、辺り一面を見渡すことができた。海は穏やかでも荒れてもいなかった。風の音は静かでもなければ大きくもなかった。私たちはいずれの海岸からも遠く離れてはいなかったのも、天気が荒れてくればそのいずれかに避難することができたであろう。それゆえに夜の静けさの中を滑るように船が進んでいく海域を心安らかに眺め、岩や島影が次々に見えては消えていくさまに眼をやっていた。(『旅』、p. 208)

この島へたどりつく前にジョンソンはマル島という陰気な雰囲気のある島を横断した。その昼間のおどろおどろしい光景は静かな月夜に打ち消され、心和むものであった。その気持ちはまた聖なる島であるアイオナ島へ向かっ

ているという状況にも影響を受けたものと思われる。アイオナ島へいたるまでにジョンソンはスタファ島の奇岩にも劣らないほどの神秘的な岸壁を目撃する。このような描写ができるのは、荘厳な雰囲気がかかっていたからであろう。旅日記を書くつもりジョンソンはここでも迫力の違いに気づき、改めて筆を持つ気にはならなかったのではないだろうか。

## 6. 工場や言い伝えもあったが

ジョンソンはこのウェールズの旅行にあたって、前年のスコットランド旅行と同様に、当初は何か目新しい景色やウェールズに特有の風俗や習慣の発見を期待し、イングランドにはない興味深いものを見出して旅行記を書こうと思っていたはずである。ウェールズ旅行中の日記には短いメモ程度の記録に混じって、旅行記としてそのまま組み込むことができるほど内容のある記録も含まれているからである。たとえば、8月3日に訪れた鉄工場や銅工場の詳細な記録がある。次は鉄工場の記録である。

私は鉄工場では、丸い棒が金づちと金床を用いて作られているのを見た。それから、半平方インチあるいはそれ以上ある一本の棒が、水力で動かされている剪断鋼で切られて、熱いうちに叩かれて、細い棒になっていくのを見た。金づちはすべて水力で動いており、小さな棒の上で動いて、手で動かすのと同じくらいの速さでとても速く移動するのであった。(Works, I, p. 187)

ジョンソンはこの工場の前に銅の工場も見学した。そこでは銅の塊が銅のローラーの間を通して、薄い銅板になっていくのを見たのであった。18世紀の西ウェールズのカーディガンシャーでは銅の鉱脈が発見され、「カ

ンブリアのペルー」という名がつけられ、またウェールズの18世紀は近代産業が芽生え、経済的發展を見はじめた時代であった<sup>19</sup>。ジョンソンは技芸協会 Society of Arts に所属しており、ビールの醸造過程や貨幣の鑄造過程を専門家も顔負けするほどに詳細に語ることができた。そんなジョンソンなので、ウェールズの産業にも注目していたはずである。

また、次のような民俗的な話題も日記にはある。

デンビーの廢墟になった教会の入り口の上の壁に石が一個あって、それがその教区の最高の学者に落ちてきて、その学者を押しつぶしてしまうと言われている。プライスという人は決してその下を通ろうとはしなかった。この石は今では取り除かれている。(Works, I, p. 182)

ジョンソンはスコットランドのエディンバラ大学を訪問した際にも類似の話を聞き、それに興味を示している<sup>20</sup>。ジョンソンはウェールズの旅を通して、工場の様子や民俗的な話題を集めて、それを旅行記にまとめるつもりがあったように思われる。

ところが、旅を進めるにつれて、樹木はイングランド同様に育ち、教会も建物は粗末であっても、現地の言葉で日々の礼拝は滞ることなく行われていたことを見出した。さらに、ウェールズ語の保存も文芸の復興にも力が注がれていた。産業も發展しつつあった。これらはすべてスコットランドのハイランドの状況とは対照的であった。かの地では道路も十分ではなく、裸足の人も多く、非効率的な農業方法を用い、ようやく貨幣経済が緒に就いたところであった。こうして、ジョンソンはウェールズの生活がイングランドのものとは変わらないと思いはじめたのであろう。

## まとめ

ジョンソンは週間新聞である『ユニヴァーサル・クロニクル』(*The Universal Chronicle*)に『アイドラー』(*The Idler*)というエッセイを連載したが、その第97号で「他人を喜ばせるために旅をしようとする人は、観察の大きな対象が人間の生活であるということを覚えておくべきである。どの国にも製造品、才人の作品、医薬品、農業、習慣、および政策に何かその国特有のものがある」<sup>21</sup>と述べている。ジョンソンは新しい工場や民俗的な話題は記録しているものの、彼の日記には訪問地の住宅や教会や城の記述が中心であり、ウェールズに住む一般人の生活や風俗習慣についての記録が全くない。つまり、一番大事な「観察の大きな対象である人間の生活」が欠如しているのである。これでは、『スコットランド西方諸島の旅』のような旅行記は執筆できなかったことであろう。その旅行記は単に住居や城や町の様子を記すだけでなく、人々の暮らしや風俗習慣に深く踏み込んで観察と考察を行い、民俗学的内容となっているからである。

ところが、今回のウェールズの旅でジョンソンが出会ったのは、脱ウェールズ化を進めてイングランド文化へ傾倒していった人々であった。ウェールズはヘンリー八世時代の1536年にイングランドに合同されたが、ヘンリー八世のチューダー家そのものがウェールズ出身であることから、上流階級のイングランド化は大きな混乱もなく進んでいた。そして、18世紀になる頃には、一般庶民のほとんどがウェールズ語話者であったのに対して、上流階級の多くはウェールズ語が理解できなかった<sup>22</sup>。したがって、ペナントはウェールズ出身であるにもかかわらず、北ウェールズを旅行した際にはカイルウイスのジョン・ロイド John Lloyd of Caerwys という牧師補を通訳として連れていたのであった<sup>23</sup>。スレイル夫人も出身はペナント同様にウェールズであったが、長い間、遠く離れたロンドンに住んで

おり、一般庶民との交流は稀であったと考えられる。この旅行中、ジョンソンは主にスレイル夫人の縁者や知人の家に滞在しており、彼らもまたイングランド化した人たちであり、ジョンソンは一般庶民の生活に触れることができなかつたのである。

また、スレイル夫人は、自らの相続問題に加えて、娘の世話、親戚づきあいで忙しくて、スコットランドにおけるボズウェル役は果たせなかつた。スコットランドの旅行にはボズウェルがいて、現地の興味深い地域を案内し、土着の人々と接する機会を積極的に設けたのであつた。ボズウェルはその旅行記で、「私はヘブリディーズ諸島への旅をジョンソン博士と私との共同企画と見なしていた。おのおのがその成功を期してできるだけのことをすべきなのだ。(中略) 私は幸いにも、博士が黙っていたであろうときに、しばしば博士を引っ張り出して話させることができた。泉は私とその湧き口を開けるまで、しばしば閉ざされていたのだ」<sup>24</sup>と述べる。ボズウェルはスコットランド旅行中からジョンソンの伝記を執筆する意図を持っており、ジョンソンの所見を導き出すことを最初から目論んでいたのである。ところが、スレイル夫人にはそのような意図はなかつたし、ゆとりもなかつた<sup>25</sup>。このボズウェル役の欠如の結果、ジョンソンは庶民の生活ぶりという旅行記に盛り込むべき最も重要な情報が得られなかつたわけである。こうして、ジョンソンは次第に旅行記執筆の意欲をそがれていったことと思われる。

決定的だつたのは、ジョンソンがウェールズのグワイニノッグのミドルトン宅に滞在中に、スコットランド旅行記の校正をやつたことである。それによって、いやがおうにもスコットランドの光景や生活ぶりが思い起こされ、ウェールズのそれと比べざるを得なかつたことであろう。校正をしながら、かの地の威風堂々とした城や廢墟となつた大聖堂、そして壮大な山々や大海原が浮かび上がつてきたことと思われる。その旅行に比べる



と、ウェールズはすべてにおいて規模が小さすぎた。

ジョンソンは旅の途中の8月16日にロバート・レベットに宛てた手紙で、「ウェールズはこれまで見てきた限りでは、非常に美しく、豊かな地域で、すべてのところは囲い込まれて耕されています。デンビーは決して貧相な町ではありません。」(*Letters*, ii, p. 149)と述べている。実際、8月4日のこと、ジョンソンはロイド氏 Mr Lloyd が所有する別の屋敷を訪れたとき、その屋敷が立派だと思った。ジョンソンはこの日の日記に、「この国は素晴らしい家であふれているように思われる」(*Works*, p. 189)と記している。しかし、旅を進めるにつれ、ジョンソンは貧相な住宅や教会を目にするようになった。日が経つにつれて、ジョンソンの日記には「貧相 (mean)」という形容詞が目立ってくるのである。

8月18日のこと、スレイル夫人の生まれ故郷のポドファリへ行く途中のアベルゲレ Abergele の町も、その夜に泊ったバンゴールの宿も「貧相」であり、その後を訪れた教会の多くが「貧相」な外観であり、「貧相」な造りであったとジョンソンは記している。さらにスレイル夫人の生誕地に近いプールヘリ Pwllheli の町も、9月8日に訪れたスランハイアドル・アム・モハナント Llanrhaiadr-ym-Mochnant の町もジョンソンには「貧相」に思われた。

「貧相」なのは建物や町の様子だけではなく、カナーク州の統監 (Lord Lieutenant) であったグリニリフォン Glynllifon のトマス・ウィン卿 Sir Thomas. Wynne 宅で出された食事も「貧相」であったとジョンソンは記す<sup>26</sup>。ウェールズにはスコットランドとは違って、目を引く大聖堂の廃墟もなければ、ラーセイ・ハウスのような華麗なお屋敷も目立たなかったようである。「貧相」な建物、「貧相」な食べ物、「貧相」な宿屋など、すべては旅行記のための興味深い話題を提供することはできなかったことであろう。

ウェールズ旅行にあたって、スコットランドと同様に何か目新しいものを見つけ出そうとしたジョンソンであるが、進むにつれて、期待はずれで退屈な旅になったことが日記からうかがわれる<sup>27</sup>。こうして、ジョンソンは、「ウェールズは好奇心をかきたてたり、満足させたりするものは何もありません。生活は完全にイングランド風です」という結論に達したのであろう。その結果、ジョンソンは旅行記執筆の意欲も萎えてしまったように思われる。その印象は3年の月日が流れても変わることはなく、ボズウェルがウェールズ行きを希望したときの「ウェールズには何かがあるのでしょうか。そこには無知の飢えを満たし、好奇心の渴きを鎮めるものがあるのでしょうか」という言葉につながっていったと考えられる。

#### 注

- 1 James Boswell, *Life of Johnson LL. D.* (1791), ed. G. B. Hill and L. F. Powell, 6 vols. (Oxford: Clarendon, 1936-64), vol. II, p. 284. ボズウェルの『ジョンソン伝』についてはこの版を用い、以下、引用箇所は本文中に *Life* と共に示す。日本語訳は本論文筆者による。
- 2 *The Letters of Samuel Johnson*, ed. Bruce Redford, 5 vols., (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1992), vol. II, p. 149. ジョンソンの手紙の引用は本書を用い、以下、引用箇所は本文中に *Letters* と共に示す。日本語訳は本論文筆者による。
- 3 Joseph Wood Krutch, *Samuel Johnson* (1944; New York: Harcourt, Brace & World, 1963), p. 432.
- 4 Peter Martin, *Samuel Johnson: A Biography*, (London: Phoenix, 2008), p. 391.
- 5 Christopher Hibbert, *The Personal History of Samuel Johnson*, (New York: Harper & Row, 1972), p. 239.
- 6 Robert, DeMaria, Jr., *The Life of Samuel Johnson*, (Oxford and Cambridge USA: Blackwell, 1993), p. 273
- 7 諏訪部仁他訳『スコットランド西方諸島の旅』（中央大学出版部、2006）、p. 12。以下、引用は本書を用い、引用箇所は本文中に『旅』と共に示す。

- 8 Samuel Johnson, *Diaries, Prayers, and Journals*, in *The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson*, ed. E. L. McAdam, Jr. with Donald and Mary Hyde (New Haven: Yale University Press, 1958), p. 179. 以下、引用箇所は本文中に *Works*, I と共に示す。日本語訳は本論文筆者による。バハグライグの屋敷は現在は B & B となっている。
- 9 吉賀憲夫『旅人のウェールズ—旅行記でたどる歴史と文化と人』（晃学出版、2004）, p. 297. Geraint H. Jenkins, 'Wales in the Eighteenth Century', in *A Companion to Eighteenth Century Britain*, ed. by H. T. Dickinson, (Blackwell, 2002), p. 399.
- 10 詳しくは吉賀憲夫『旅人のウェールズ—旅行記でたどる歴史と文化と人』 p. 51 参照。
- 11 そのデンビー城はさらに崩壊が進んで、2011 年 7 月から半年の予定で改修作業が行われている。
- 12 E.L. McAdam. Jr. はジョンソンがチャーク城について多くを語らないのは、「ジョンソンがエドワード一世時代の城については十分にそれまでに記してきたからだろう」と述べている。*Works*, I, p. 213 参照。
- 13 吉賀憲夫『旅人のウェールズ—旅行記でたどる歴史と文化と人』 pp. 156-176 に詳しい。
- 14 同上書、p. 51.
- 15 John Cannon, *Samuel Johnson and the Politics of Hanoverian England*, (Oxford: Clarendon, 1994), p. 231.
- 16 Geraint H. Jenkins, 'Wales in the Eighteenth Century', p. 400.
- 17 Nicholas Hudson, *Samuel Johnson and the Making of Modern England*, (Cambridge: Cambridge University Press, 2003), p. 164.
- 18 この道は現在は広い自動車道となっており、今日の旅行者はなんらの危険も感じることなく、通り過ぎてしまうことになる。
- 19 Geraint H. Jenkins, 'Wales in the Eighteenth Century', p. 396.
- 20 ボズウェルは『ヘブリディーズ諸島旅日記』（諏訪部仁他訳、中央大学出版部、2010）で次のように記している。

私は古い壁が以前カレッジの一部を取り囲んで建っていた場所を博士に指し示した。私の記憶では、その壁は今にも崩れそうな感じで突き出て

おり、大学者に倒れかかってくるというオックスフォードのロジャー・ベーコンの研究棟にまつわるものと同様のよくある言い伝えがあった。この壁は少し前に取り壊されていたが、それは通りを広げてもっとよい壁を造るためであった。ジョンソン博士はスコットランドの学問に対して愉快的皮肉を言う機会に喜び、「彼らは壁が決して倒れないのではないかと心配したんだね」と述べた。(p.31)

- 21 Samuel Johnson, *The Idler and The Adventurer* in *The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson*, ed. W. J. Bate, John M. Bullitt and L. F. Powell (New Haven: Yale University Press, 1963), vol. II, p. 300. 日本語訳は本論文筆者による。
- 22 吉賀憲夫『旅人のウェールズ—旅行記でたどる歴史と文化と人』 pp. 51, 294; Jenkins は 1801 年においても 10 人中 9 人までがウェールズ語のみの話者であったと述べている。Geraint H. Jenkins, 'Wales in the Eighteenth Century', pp. 393, 397 参照。
- 23 吉賀憲夫『旅人のウェールズ—旅行記でたどる歴史と文化と人』 pp. 51-52.
- 24 ポズウェル『ヘブリディーズ諸島旅日記』 p. 311。
- 25 W.J. Bate も、Adrian Bristow もこの点に言及している。Walter Jackson Bate, *Samuel Johnson* (1975; London: Hogarth Press, 1978, rpt. 1984), p. 478; Adrian Bristow, *Dr Johnson & Mrs Thrale's Tour in North Wales 1774*, (Wrexham: Bridge Books, 1995), p. 24.
- 26 プールヘリの町は現在ももの寂しさの漂う町である。ホテルも B & B もほとんどなく、さびれた感じの町であった。また、ジョンソンらの出かけたグリーンリフオンは 1751 年にウィンによって建てられた赤煉瓦の屋敷であったが、1836 年に火事で焼失し、現在の建物は 1837 年から 46 年にかけて建てられたものである。
- 27 Adrian Bristow, *Dr Johnson & Mrs Thrale's Tour in North Wales 1774*, p. 23.

\*写真は筆者の撮影によるものである。18 世紀のスルウェニー・ホールの原画は当主の提供によるものである。記して感謝申し上げます。